

## 1 部 記念講演

### 「佛教大学社会学部の未来

—男女共同参画・女性活躍推進を含めて期待すること—」

大阪女子短期大学 学長 星野智子先生

**関谷** それでは記念講演に移らせていただきます。佛教大学社会学部の未来，男女共同参画，女性活躍推進を含めて期待することと題しまして，大阪女子短期大学学長，星野智子先生にご講演をお願いいたします。よろしくお願いします。

**星野** 佛教大学社会学部 50 周年お迎えになられまして，誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。私，佛教大学文学部仏教学科卒業を卒業して，高校で非常勤講師を勤めながら，佛教大学大学院社会学研究科博士前期課程を修了いたしました。現在，大阪女子短期大学学長を務めております。今，田中学長先生のごあいさつをお伺いしまして，非常に懐かしく，私がサンスクリットを習った時の事を昨日の事のように思い出しました。私は，佛教大学仏教学科で学び，そして社会学研究科で専門を学んだ両面から，今回お話しさせて頂けると思っておりますので，どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず，佛教大学と佛教大学社会学部の特徴，そして私が受けた教育を少し簡単に振り返ってお話しさせて頂きたいと思っております。佛教大学社会学部は 50 周年をお迎えになりましたが，私は約 25 年前に大学



院社会学研究科博士前期課程を修了いたしました。本当に久しぶりに大学に来まして，田中学長先生はじめ，学部長の近藤先生，それから私の同窓生の皆さま方にお目にかかって，大変懐かしく温かな気持ちになっております。佛教大学は，皆さまご存じのように，学章そしてロゴ・マスコット・全学共通科目に表れているように，仏教が教育の根底にある大学です。学章そしてロゴ・マスコット・全学共通科目は，仏教の精神が反映されたものです。全学共通科目で，「ブッダの教え」「法然の生涯と思想」があるという事は，全学科の学生が仏教思想を学べるという事ですので，これは，人が生きる心の支え，心の指針になる教育をされている証だと思っております。佛教大学建学の理念はホームページ等でさまざまに発信されていますが，仏教精神にのっとり，

自分が何をすべきか、何が出来ののかを正しく判断し、自然に手を差し伸べる気持ちが持てる人材、そして気持ちだけでなく、そのための行動力と技術を併せ持った人材の養成を目指しておられます。私は佛教大学文学部仏教学科卒業ですので、仏教をさまざまな必修科目で学んでまいりましたが、好きな言葉は「自利利他」です。鷹陵同窓会会長が紫野新聞に書いておられましたけれども、私は「自利利他」について「自分のためにした事が他人のためになる、他人にして差し上げた事が自分に返ってくる。そういった事で世の中は成り立っている」と解釈しております。仏教学科でさまざまな科目を学びましたけれども、専門必修科目としましては仏教学や浄土学関連を学びまして、人のありようや生き方の指針を学びました。専門科目は中井先生の歴史、また満田先生の社会学等を学ばせて頂いて、他学部の専門性の高い教育を教養科目で学ぶ事が出来て、大変深い学びが出来たと思っております。そして、田中学長先生をはじめ本当に優しくユーモアあふれる先生方で、あっという間の4年間でした。仏教学科で取得した宗教の教員免許状が役に立ち、学部卒業後に母校の四天王寺高校で非常勤講師として就職し、教育活動の第一歩を踏み出す事が出来ました。

この写真（パワーポイント）は、学部時代の私ですが、辞書を片手にピースするという、その世代特有のものを撮っておりまして非常に稚拙な感じがいたしますが、これは仏教学科の先生の研究室で撮らせて頂きました。大学院では、本日もいら

して頂いている場知賀先生にお世話になりました。私は英語が苦手でしたが、場知賀先生に「出来るよ、大丈夫だよ」と言って頂きました。社会学の専門の外書を読む講義がありましたけれども、一生懸命読んで、そして先生に教えて頂いて、外書購読は良い成績をつけて頂いた事が自信になった事を覚えております。また社会学理論に関しまして、大学院で初めてふれて学問の特性を知りました。そして、研究するという事はどういう事なのか、仮説を立て検証する事、参考文献のあげ方などを一から教えて頂きました。私の指導教授は小関三平先生でした。小関先生は本当に自由な先生でして、お天気の時には近くのハーブのお店に行こうと私たち院生を連れ出してくださいました。ハーブティーのお店で優雅にお茶を飲みながら論文指導をして頂いた事を昨日の事のように思い出します。また、副指導教授は山口信治先生でしたが、医学に精通しておられる先生でいらっしやいますので、医師がかける言葉がけで患者の容態が変わっていく事等、事例を挙げてご教示頂きました。人が発する言葉がポジティブか否かで、どのように関係性・社会が変わっていくのかを学びました。

この写真（パワーポイント）は、大学院時代の学友と私ですが、真ん中が医師であり佛教大学の非常勤講師でいらした中元先生で、医療社会学を教えてくださいました。先生は今もお元気で、現役の医師でいらっしやいます。学友として写っている方は、大阪女子短期大学幼児教育科主任の今西先生と佛教大学教員の大東先生です。当時30歳ぐ

らいかなと思っております。当時の社会学部の先生方は私たち大学院生を気軽にお食事等に誘って頂き、その中でも単に雑談をするのではなく、常に社会学がベースの深いお話がそれぞれの先生方にありました。お食事会があると、社会学理論にふれるという日々がありまして、本当に楽しい研究生活の第一歩でした。学長先生も学部長先生もおっしゃっている事ですが、社会学は、人と人との間を研究する学問だと思います。個人と社会の関係性を知る、そして常識を疑う、すべての事象が研究対象になる百科事典の社会学が特性です。人と人との間を研究する事は、人と人との間がよくなる、関係性がよくなる、その社会集団が発展し前進していく。そのような事を目指す学問だと考えております。そして、自分の属する集団が少し嫌だなと思ったり、あるいはこういう集団から抜きたいなと思っても、人と人との関係性をよくする事で、人と人とのつながりで成り立っている集団がよくなっていくんだ、そういう事を学びました。これを私の人生の糧にしながら今も職業人生を歩んでおります。そして常識を疑う。私が学部を卒業する時代は女子学生の多くが専門職に一旦就きましたけれども、その後、結婚・妊娠し、そして出産後退職した女性の学友がほとんどです。そういう時代でした。けれども、私は社会学を通して「多様な自己実現があり、どの道もそれぞれ楽しい」事を理解し、自分自身の人生を切り開いてきました。そして「百科事典の社会学」の考えに基づき、何を研究してもよいという事で、私は宗教社会学、家族

社会学、法社会学へと関心を広げていきました。国内外の宗教団体の参与観察をはじめ、オーストラリア・カナダ・日本の島々のお墓の研究を行い、先祖供養観等々もヒアリングし、フィールドワークを実践いたしました。20・30 歳代の頃のフィールドワークですが、現場に出て見て、そして人々の意識を聞き取ってという貴重な体験をいたしました。そして、お墓や死後に関する社会保障の研究にもつながり、男女共同参画の研究も併せながらしております。

社会学部は、人と人とのつながりを学ぶ学部であり、私が学んだ社会学と現在の佛教大学学案内に書いてあることが符合します。

私の近年の研究を少し紹介したいと思います。保育士の養成科目を担当しておりますので、『家庭支援論』『家族のこれから』という著書、また宗教社会学関連・女性学関連・墓の法的な課題等々の著書（共著）・論文があります。審議会は男女共同参画が主となり、また学会は学際的に活動しております。男女共同参画関係の審議会にかかわり、そして日本法政学会をはじめ、さまざまな学会で活動させて頂く中で、やはり人と人とのつながりで、そこで教え導いて頂く人のご縁、人と人とのつながりというものを日々実感しております。

今日は女性活躍がテーマですが、女性活躍といってもさまざまに女性活躍の形があり、主婦の方が地域社会で活躍されている場合もあり、子育てでネットワークで活躍されている場合もあり、職業生活で活躍されている場合もあります。摂津市の広報誌で、

さまざまな女性の活躍について私がコメントさせて頂いたとも併せてここで紹介いたします。

私の勤務している大阪女子短期大学は、在学生も卒業生も全て女性です。私は世代が違いますので、女性だからわかるだろうといわれても、世代が異なるとやはり価値観が異なってきます。私は、社会学研究科で人と人とのつながりを研究いたしました。私は他大学・短期大学の学長先生方のご研究には足元にも及びません。私がこれだけは自信があるというものは、全学生の名前を覚え、全学生の今困っている事を知り、全学生の楽しみにしている事を把握出来ている事です。2016年4月、私は学長に就任いたしました。私が学生たちに何が出来るのか考えた時に、学生たちの思いを受け止める事だと思い、お昼休みには学生とのフリーな茶話会を毎日実行することにいたしました。2階の非常に厳粛なムードのお部屋がずらりと並んでいるところに学長室があるのですが、お昼休みだけは別にして、学生が自由にノックして入室し、私とお茶を飲み、日々楽しい女子会をしています。私は、「女子」という言葉が好きなんです。家に帰って「今日も学生と女子会したよ」と話しますと、娘がじっと私の顔を見まして、「お母さんな、もう女子違うねん」って言うんですね(笑)。でも、私の中で大きな括りで言うと女子会なんです。女子会では、学生たちがぼろりぼろりと困り事や楽しみにしている事を言います。そうすると私は、それをキャッチし、聞き流しません。学長室で言うのですから意味があるんだら

うと思っています。そして、学生の困り事を解消したい、楽しみにしている事もっと増やしたいと思い、1年間過ぎていきました。そうして、2017年の私の目標を何にしようかと考えました。2016年度の茶話会に来る学生は決まった学生たちでした。本当にシャイな学生は来ません。また、私が授業等で注意した学生も積極的には来ません。ですので、私は全学生の飾りのない気持ちを聞きたいと思いまして、全学生と面談するという事を実施いたしました。これは、大学関係者の方々はよくわかって頂けると思いますが、大変な事です。学生の時間割・学生のアルバイト・実習・就職活動と私のスケジュールの合間を縫って、一人一人はめ込んでいくんです。これは各学科の主任・副主任や事務局長や事務局の皆さんが、一生懸命毎日、「キャンセル入りました」「体調悪いそうです」と言いながらずっと動かしてくださって、3カ月間かかりましたが、すべての学生と話し終えました。私との面談15分だけのために、往復6時間かけて来た学生もいました。私が最後に、「ごめんね、遠いところ悪かったね」と言いましたら、「来てよかったです、私の将来が見えました。ありがとうございます」と応えてくれた時には、本当に嬉しい気持ちになりました。私は、卒業生の思いも含めて、学生たちの思いを受け止めています。聞いた事について「そうなの、大変ね。」で終わらせません。その日にあった事は、委員会に関する事であれば委員会委員長、また学科に関する事であれば主任、事務局に関する事であれば事務局長にその日のうちに伝達し、改善ま

た善処してもらうようにお話ししてまいりました。学生たちは、紹介した写真に代表されるように、笑顔一杯です。楽しい七夕納涼祭も終わりました次はクリスマスパーティという事で、学生たちは日々楽しんでいます。

少し私自身の育児のお話をさせていただきます。私は、育児休業を9カ月取りまして、職場では、教員では初の取得でした。そして、子どもは9カ月で保育所に入所いたしました。私は子育てしている間、「1時間目や5時間目を外してください」と言った事はありません。「土曜日・日曜日の行事、宿泊を伴う入試を外してください」と言った事も一度もありません。子どもが乳児の時からそうです。夫が非常に協力してくれ、そして夫に任せ、夫がどうしても都合がつかない場合には私の親、また夫の両親、そして時には近所の人に来てお世話になって、仕事に邁進し、そして子育てと仕事を両立してきました。私は当時、少し意地になっていたと思います。「女性は使えない」「育児休業取ったらやっぱりあんなやな」というふうに思われたくない、そのような気持ちがありましたので、一生懸命出来る事はいたしました。また、次に育児休業を取得する人が使いにくいというような取り方をしたくないので、よいモデルとなりたかったという思いもあります。子どもが乳児や病気の時には、家庭を優先いたしました。保育所から「お子さんお熱ですよ」と電話が入ってきましたら、学生には本当に申し訳なかったのですが授業を中断して、保育所に向かった事もあります。優先順位をつけ

る事は本当に重要だと思います。苦渋の決断なんです。学生も大事、子どもも大事、天秤にかけられません。けれども、命がかかっている事は最優先されるべきなんです。ですので、その時の私の最優先は娘でした。また、私は評価されようと思って仕事をした事は一度もありません。コピーでも、また案内であっても、人の目にふれない業務であっても、私に与えられて、私がすべき仕事は精一杯努めてまいりました。評価を気にして目立つところをしてるだけでは、職業人としては失格だと思っています。

そして、私が育児と仕事を両立するため大切に思う事は、特に女子学生の皆さんには心に留めて頂けたらありがたいと思いますが、やはり、家事・育児と仕事とのバランスです。そしてそのバランスをとるためには、子どもが乳児の時には子ども優先、そして子育てが終えたら仕事というようなライフステージごと、子どもが病気の時は子ども優先という日ごとの優先順位をつける事が大事なのではないのでしょうか。そして、最近気になっている事をお話します。法で守られている事たくさんあります。けれども、「法律で決まっていますから、こうします」と“ビシヤリ”とやってしまうと、職場の人間関係が悪くなってしまう時があります。やはり、譲り合って、「法的な事ではここまでだけれども、みんなの事を考えてここまで使います」という事も大切だと思います。やはり社会学、人と人との間、個人と社会の関係性を知っている者であれば、スムーズに出来るのではないかなと思っています。私は、仕事に家庭を持ち込ま



ない、家庭に仕事を持ち込まないという事は、理想だなと感じます。やはり、家庭の中に仕事を持ち込みますし、仕事にも、やむを得ない時には持ち込んだ事もあります。娘が乳幼児の時に、オーストラリア・カナダに学会発表に連れていった事もあります。もう 15 年ほど前ですが、非常にベビーシッターも充実していて、子どもが“うろちょろ”していても皆嫌な顔をせず、皆がにっこりとしてくれ、子ども連れで学会に行く事が快適だと感じる状況でした。日本は厳格で、日本の学会に託児所が設置されたり、おんぶしながらでも学会発表出来るようになるのですが、「子連れで、、、」というようなネガティブな声を聞いたり雰囲気を見ると、躊躇してそれを活用出来ない状況は、まだ少しあるのかなと思っています。

現在、私は、子育て期に配慮してもらった事を恩返しするつもりで働いております。それは、仏教精神の報恩につながると思います。自分が受けた恩は返させて頂きたい、私が本当にお世話になった事を返したい、そのような気持ちで今、仕事に邁進しております。

女性活躍の今後の課題を少しお話しさせて頂きます。旧姓使用についてですが、私はずっと「星野」で通しておりますので、私と家族の関係性が今日初めてお知りになった方々いらっしゃると思いますが、私の戸籍名は「窪田」です。日常生活は「窪田」で過ごしております。私の旧姓使用は、私の勤務している大阪女子短期大学・谷岡学園が運用として認めてくれています。また、審議会など自治体も私の旧姓使用を認めて

くれています。卒業生に聞きますと、企業等で旧姓使用を申し出ても許可してもらえないという話を聞いたりもします。日本は世界でも珍しい夫婦同姓原則の国ですので、法的に結婚すると、女性の 97% 程度が変更するというデータもあります。女性のキャリアを考えた時に旧姓使用という事が一つ方法としてあるのですが、それがかなわないという状況もあるようです。旧姓使用は職場の運用に委ねられているからです。また、私のパスポートは両名表記しておりますが、その両面表記も、海外で研究活動した実績を持ってきてくださいとパスポートセンターに言われまして、必死で集めた記憶があります。今は随分緩やかになっていると聞いております。また、金融機関も緩やかになっていて、戸籍名と旧姓使用と選べるような社会の動きがあるようです。育児休業は、有給がどんどん上がっています。平成 29 年 10 月施行の育児休業法改正では、保育所に入れなかった場合には、最長 2 年間休暇が取れるというように期間延長になりました。また、子どもの行事等参加の配慮がされるようになり、育児休業制度の詳細の説明を企業側がするようにという改正がありました。これまでは、内容を十分に理解せずに居づらくなって辞めていった人もいますので、雇い主が育児休業を取りたいという人たちに対して説明していく、理解しやすいように案内していくというのは、重要な改正だと思っています。

大きな課題をここで少し挙げさせて頂きます。子どもの保育所入所は、やはり働く女性にとっては必要不可欠です。核家族が

ほとんどですので、もう昔のような拡大家族ではなく、祖父母と同居して見守ってもらうという状況ではありません。保育所入所が必須になりますが、保育所数が足りない。そして、フルタイムでないと保育所入所の優先順位が下がっていきます。保育所入所出来ない時のために法的には最長2年まで延期されたんです。私はこの法律改正を仕方のない手当でだと考えております。そして、何度改正しても男性の育児休業取得率は上がらないという状況です。男性の育児休業取得率は現在、3.16%、女性は81.8%です。厚生労働省が男性の取得率を13%にしていますが、10%どうやって上げるんだろうと思います。男性が育児休業する事は、やはり子育てをする中で、子育ての楽しさやしんどさを味わい、妻を理解し、子どもとの濃厚な関係を初期から作るという事で、本当に意義がある事だと考えます。

先ほど、私は育児休業を9カ月取得したという話をいたしました。2001年当時は最長1年間取得する事が出来ました。娘は12月31日生まれで丸々一年間取る事は私の権利として可能でした。法的には出来るんです。けれども職場で、12月31日に復帰し、別の教員でほとんど進んでいる授業を年明けから私が担当する事で学生たちが不利益をこうむらないはずがありません。権利を押し通すことで学生の習熟にも影響を及ぼします。法的に守られているものと、その運用の仕方とは違います。職場の人と人との関係性、それがもたらす影響・結果を考えると、法で守られている事のかたくなに主張する事は出来ないとい私は考えました。

そして後期授業開始に間に合うように9カ月間、取得しました。育児休業中は、私の話し相手は夫のみ、そして育児するという生活でしたので、本当に声が小さくしか出なくなっていたんです。そして9カ月たって教壇に立ちました。手は震えて汗は出ます。話したい知識がばらばらになってまともありません。ですから、私は9カ月であってもブランクは長かったと思っております。このような事から、「今は育児休業を2年間取れて良い時代になった」とは思いません。育児休業後は、原則同じポジションに戻らなければならないんです。そうしなければ法的に許されないんです。2年経って、例えば医療従事者が同じポジションに戻れますかと私は言いたい。2年という期間が女性のキャリアにどのような影響が出るのかと懸念しています。法の改正で育児休業が延長されたことについて、私の解釈は「仕方がない、日本社会が今の出来る手当で」だと思っています。それよりも、子どもがスムーズに保育所に入所出来、親は現場力を保ちながら育児休業を取っていった方が、良いように思います。また、日本の認可保育所はフルタイムでないとなかなか入所出来ませんので、「親は時間短縮労働をして、子どもは保育所に入所して、子育てに慣れながら仕事をしていったらいい」という声も聞きますけれども、それは中々難しい話です。

先ほど申してきましたところを振り返りながら、女性活躍推進の本当の意味をここで整理したいと思っております。法律は着々と整っていますが、ジェンダーギャップランキングは、2011年の98位から2016年に

は 111 位に下がり、2017 年は 114 位へと順位を落としています。つまり、育児休業法が改正され、男女共同参画社会基本法・女性活躍推進法が成立し、法的には充実しているのに順位を落としているんです。法が上手に運用されていないと私は感じています。また、法が改正されるのが遅く、「どうしてこの時代にこれをしなかったのか」「どうして困ってから改正されるのか」という思いは女性労働者としてあります。でも、それを言っても仕方ないんです。今出来る事を考えると、それは社会学的な課題になってまいります。

さて、佛教大学の女子学生の比率が、社会学部、年々下がっています。私が今回講演を引き受けるにあたって頂いたデータが沢山あります。データによれば、社会学部の女子学生数が減って 62 名弱しかいなく、10 年前より極端に減っています。2002 年・2003 年は女子学生の数の方が多かったんです。そして、2004 年からなぜか減少していきます。私は、看護学科が出来、看護学科には女子学生がたくさんいますので、看護学科の影響かなと思いましたけれども、看護学科が出来た前の 2011 年、出来てからの 2012 年度、両方とも社会学部の女子学生は 129 名の入学生です。大変申し上げにくい事を言いますが、自分が考えている事を口に出さないと、社会を変えていけないんです。ですから私は申します。女子学生にとって魅力のある教育内容あるいは魅力のある出口が欠けたり低下しているのではないかと感じています。また時代の変革についていけないのかなと感じており

ます。やはり両性がいて、多様な学生がいて、より良い社会を考え、よい社会に変わっていけるんです。そういう点から言うと、男性に偏った学部であってはもったいないと思います。女子学生にとって魅力のある学びが出来、魅力あふれる出口がある学部になって頂きたいと思っています。2016 年の進路先データによると、企業は 74.6%、流通からサービス、商社、メーカー、不動産、金融と多岐にわたっています。この割合は 2015 年度と大きな差はありません。私は、この社会学部の女子学生の最近の減少を確認して、そして改めて 2018 年大学案内を見ってみました。そうしますと、卒業生インタビューで資生堂研究をした女性の卒業生の声が載っていました。そこには、「私自身、長く働き続けるために、まだまだスキルアップします」という事が書いてありました。これを読んで、男子学生は一生続ける事が前提なのに、女子学生は「長く働き続けるため」と思わざるを得ない社会環境だと改めて思いました。つまり女子学生や女性の卒業生は、妊娠・出産・子育てしながら生涯働くというモデルも少なく、具体的に将来設計がしにくいということなんです。

私は 50 周年を迎えた社会学部に期待する事といたしまして、さらなる男女共同参画・女性活躍推進をこの場で提案したいと思っています。先ほどから申しておりますように、法学は法学の領域があります。法律の内容や改正は法学の専門です。社会学が出来た事は、共生社会の実現、それに寄与する力、差異や多様性を尊重する態度、コミュニケーション力、社会を見る幅広い視



野, この4つがキーワードです。そして私は、具体的にこのように考えました。例えば、私が今までお話ししてきました育児休業・男女共同参画・女性活躍推進, その法律の内容を正しく理解出来てない人が雇い側も、それから労働者にも多数います。法律をわかりやすく社会に発信し、その意義を社会に浸透させる有効な方法を実行し、具体的に提示する。また、これは社会学部の得意分野だと思いますが、関連法成立、改正後に残る課題について、働いている人たちへの聞き取り調査などを行って明らかにする。そして、解決策を理論的・実証的に示す。そして、先ほど挙げたように、出口は多種多様なんですから、それぞれの職種・事業所別の男女共同参画・女性活躍のための施策や運用状況を調査し、それぞれに合う処方箋を提示する。そして、異業種でも参考になる事はあるので、それぞれの職場で行われている施策・運用方法を概観出来るように整理する。本当にこれだけでも偉業だ

と考えます。こういった事をぜひ実現して頂きたいですし、社会学部の使命とお考え頂く事で、社会学部に女子学生がさらに増え、そして、真の男女共生が出来る学部になると思っております。佛教大学の理念、そして社会学部で培われる力、これが多様な自己実現を可能にし、社会をよくするために必要な教育だと卒業生を代表して思っております。佛教大学建学の理念、そして社会学部で培われる力を元に、ますますのご発展をお祈りいたします。

ご清聴ありがとうございました。

**関谷** 星野先生、ありがとうございました。ここで、次のパネルディスカッションの準備のため、5分ほど休憩を取らせていただきます。2時半から再開いたします。ちなみに、この会場の壁に貼ってありますのは、公共政策学科、現代社会学科の各学生の研究発表のパネル展示でございますので、もしよければ、ご覧いただきたいと思います。